牧師のデスクより　　使徒言行録14:19-28

パウロの不屈の伝道精神／十字架なしに栄冠なし

リストラでの騒動がおさまってから、どの位経ったか分からない。新たな問題が起った。パウロとバルナバの福音宣教に反感と憎しみを抱いていたピシディアのアンティオキアとイコニオンのユダヤ人が、リストラにも押し掛けて来てパウロとバルナバを攻撃した。

彼らはリストラの群衆を煽動してパウロを襲い、石で打ち、死んでしまったと思って、彼を町の外に引きずりだした。石打ちというのは、激しい苦痛を伴うむごい刑である。パウロが「死んでしまった」と思ったほどであるから、その激しい苦痛のために失神状態に陥ったと思われる。

半死半生で町の外に引きずり出されたパウロをリストラの弟子たちは介抱し、その見守る中で「パウロは起き上がって、町に入って行った」とある。そして、なんと翌日には、バルナバと一緒にデルベに向かって出掛けたというのである。ルカはさりげなく、僅か一行で書いているが、その時のパウロの傷の痛みを想像して見よ。それは大変なことだったと思う。

晩年になってパウロはその時のことを述懐し、弟子のデモテにこう書いている。「しかし、あなたは、私の教え、歩み、こころざし、信仰、寛容、忍耐、それから、私がアンティオキア、イコニオン、リストラで受けた数々の迫害、困難によくも続いてきてくれた。そのひどい迫害に私は耐えて来たが主はそれら一切のことから私を救い出してくださった」（第2テモテ3:10-11）主の助けと救いがなければ、到底、耐えることが出来なかったであろうとパウロは言う。

こうしてパウロは、実に痛々しいほどの姿でリストラを後にして、次の伝道地デルベに向かう。デルベはリストラから南東へ約60マイルにある町。つらく、長い旅だったと思われる。デルベでの伝道の詳しい記録をルカは残していないが、そこで大勢の人が福音を受け入れて信者になった。これはパウロにとって大きな慰めであったろう。

デルベ伝道が終わった。それから彼らはどうしたのか？彼らは再び「リストラ、イコニオン、アンティオキアの町々」に引っ返して行ったのである！彼らを迫害した町々に！何故パウロは、そのまま東へ進んで、故郷のタルソに行かなかったのか？地図を思い浮かべれば分かるが、このデルベの町を東に旅を続け、山を越え峠を越えればパウロの故郷キリキアのタルソに行き着く。そこからシリアのアンティオキアに向かうのが、はるかに近道だったのである。しかし、彼らはそうしなかった！

何故そうしなかったのか？　彼らは生まれたばかりの教会を／信徒たちをそのまま放っておくことができなかった。今、困難な中にある信徒たち、これからさらに困難に直面するであろう教会を力づけなければならない、教会として整えなければならない、そこで、彼らはあらゆる危険を冒して、再び迫害と反対が待ち構えているであろうそれらの町へと引っ返していったのである。そして彼らは神の国に入るには様々な困難があるけれども、決して望みを失わず、信仰を持ち続けるようにと信徒たちを励まし、また教会ごとに長老たちを任命し、断食をして祈り、彼らを主の御手にゆだねて、パンフリアのペルガに向かった（22節）。なんという愛、なんという忍耐、なんという情熱！！　その不屈の伝道精神に深い感動を覚える。